

水稲オリジナル品種「いわてっこ」の栽培法

良質米生産の目安とする期待生育量は、 m^2 あたり穂数 420～500 本、籾数 27 千～33 千粒、登熟歩合 80%以上、このときの玄米収量は 500～550kg/10a である。施肥量はあきたこまち並とし、基肥窒素施用量は 6kg/10a 以下、幼形期追肥を基準とし 2kg/10a とする。刈取り適期の目安は、出穂後積算温度 950～1050 度である。

表1 「いわてっこ」の期待生育量

収量水準(kg/10a) (1.9mm 篩)	500～550
穂数(本/ m^2)	420～500
1 穂籾数(粒)	65
籾数(千粒/ m^2)	27～33
玄米千粒重(g) (1.9mm 篩)	22.7
登熟歩合(%)	80～90
稈長(cm)	75～85

施肥法

施肥量は、「あきたこまち」並。

基肥窒素施用量は 6kg/10a 以下。

追肥は幼形期追肥を基準とし 2kg/10a。

多肥では倒伏しやすく、玄米品質・食味が低下しやすいため、多肥栽培は行わない。

刈取り適期

出穂後成熟期までの積算温度はおおむね 950～1050 。

留意点

- ・いもち病に対しては、「たかねみのり」より抵抗性が弱いので基本防除は厳守する。
- ・最高分けつ期の目標茎数は550～650本/ m^2 。
- ・幼形期追肥を基本とし、葉色が濃い場合は追肥を控える。
- ・幼形期における稲体窒素濃度は2%前後、稲体窒素吸収量は5～7g/ m^2 と推定され、葉色は「たかねみのり」より淡い傾向にある。
- ・品質・食味を低下させないため、肥培管理の徹底、適地作付けを厳守する。
- ・籾数が少ない場合、出穂後積算温度900度前後でも成熟期に達することがあるので、適期刈取りに努める。

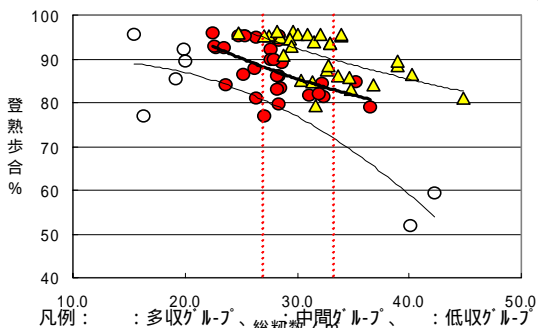


図1 m^2 籾数と登熟歩合 (H11～13)

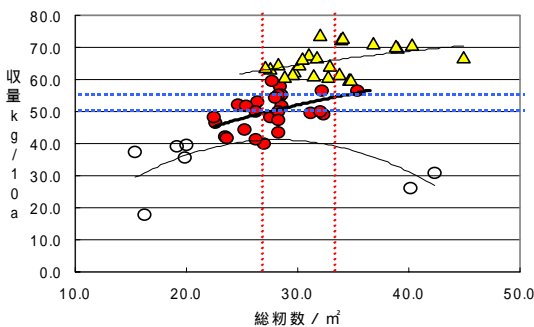
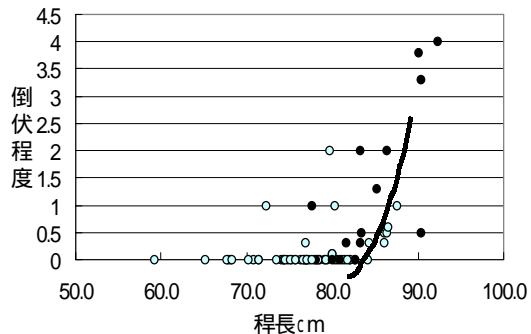


図2 m^2 籾数と玄米収量 (H11～13)



凡例： 基肥N8kg以上 N8kg未満

図3 稈長と倒伏 (H11～13)

稈長 85 cm 以上では倒伏程度 2 以上となることが多い。基肥Nが 8kg/10a 以上では稈長 85cm 以上になり倒伏しやすい。